

令和4年度 第11回  
高石市防災シンポジウム  
報告書

高石市総務部危機管理課

第11回（令和4年度）高石市防災シンポジウム  
『地域防災力～自主防災組織と消防団との連携～』

日 時 令和4年8月8日（月） 開 始 13時00分  
終 了 15時00分

場 所 たかいし市民文化会館「アプラホール」

第1部 基調講演「地域防災力の推進～自主防災組織・消防団の役割と連携～」  
講演者：

山口大学大学院 創成科学研究科 准教授  
総務省消防庁 消防大学校 客員教授 瀧本 浩一氏

第2部 パネルディスカッション  
「地域防災力～自主防災組織と消防団との連携～」

コーディネーター：  
高石市防災危機管理アドバイザー、  
神戸大学名誉教授、兵庫県立大学名誉教授、  
日本防災士会理事長、減災環境デザイン室顧問 室崎 益輝氏

パネリスト：  
山口大学大学院 創成科学研究科 准教授  
総務省消防庁 消防大学校 客員教授 瀧本 浩一氏  
第1区自治会顧問  
（前第1区自治会自主防災会会長） 中谷 正彦氏  
高石市消防団 取石分団副分団長 小谷 恵美子氏  
高石市副市長 福井 淳太

聴 衆 約220人  
（自主防災組織、民生委員、各種団体、防災会議委員、教育保育機関、  
高石防災協会加盟企業ほか）

## 防災シンポジウムの開催にあたって

近年、全国各地において、豪雨や地震など大規模な自然災害が頻発化、激甚化しております。8月4日の山形県や新潟県などで最上川が氾濫するなどの被害をもたらした記録的な豪雨や、先月7月に埼玉県などで数十年に1度の記録的な豪雨、昨年土砂災害が発生した熱海市の豪雨や九州北部など西日本での豪雨、一方、地震では、平成7年の阪神大震災以降、平成23年の東日本大震災、平成28年の熊本地震、平成30年の大阪北部地震や北海道胆振東部地震など、大きな被害が生じています。

高石市でも、昭和57年の台風と集中豪雨では総雨量231ミリ、時間雨量53ミリの降雨により1,954戸に浸水被害、また平成16年にも総雨量121ミリ、時間雨量77ミリの降雨により275戸に浸水被害が発生しました。また平成30年9月の台風第21号では、強風により樹木の倒壊や停電があり、住宅の損傷として、屋根瓦が落ち、屋根損壊など約1,500件の家屋被害もありました。また、地震としては、平成7年の阪神淡路大震災では、高石市内の住宅では一部損壊として2,441戸に被害が発生しました。

高石市域ではこれまで、大阪府や国の協力のもと、風水害対策として、芦田川や王子川の水門・排水機場の設置、芦田川を二層化する改修事業の実施、また地震対策として、学校教育施設の耐震化、民間施設の耐震補助、平成23年の「東日本大震災」以降は、地震津波対策として高石市地震津波総合避難訓練、総合体育館カモンたかいしの建設（旧市立体育館の移転）、津波避難タワーの設置、高砂1号線の液状化対策、企業立地等促進条例による災害対策設備の課税免除、災害時に避難所として利用する市内小中学校の体育館へのLPガス空調設備の導入も実施し、公助による対策が進められてきました。

また、大規模災害時には、公的な防災機関が十分に対応できないときに、頼りになるのは地域ぐるみでの協力体制です。阪神淡路大震災では、約7割の方が地域住民による自発的な救出・救助活動で命が救われました。

本市では、小型可搬消防ポンプを一部の自主防災組織へ貸与し、消防団指導の下、自主防災組織で消火訓練等が実施されていますが、本市で平成18年度から発足した消防団は、消火・救助訓練や地域の防災訓練の支援、救命講習などの活動に加え、市の総合避難訓練等で小型可搬消防ポンプを使った初期消火訓練の普及活動を実施しており、今年7月2日、産経新聞社の大阪の消防大賞を受賞しました。

大規模災害が発生したときには、行政機関だけではなく、自治会や自主防災組織、消防団といった組織の連携が重要です。

このような状況等を踏まえ、新型コロナウイルス感染症の予防策を講じながら、本市では8月8日に、第11回高石市防災シンポジウムを開催いたしました。

第1部の基調講演では、山口大学大学院創成科学研究科准教授で、総務省消防庁消防大学校客員教授も務められている瀧本 浩一氏に「地域防災力の推進～自主防災組織・消防団の役割と連携～」をテーマとしてご講演いただきました。

また第2部では、コーディネーターに本市防災危機管理アドバイザーの室崎 益輝氏、パネリストに瀧本浩一氏、防災活動を実施している地区を代表して第1区自治会自主防災会の中谷顧問、高石市消防団発足当時から女性消防団員として活動をしている小谷取石分

団副分団長、本市副市長の福井の5名により「地域防災力～自主防災組織と消防団との連携～」をテーマにパネルディスカッションを実施しました。

災害発生時にひとりひとりが自らの命を守るため躊躇（ちゅうちょ）なく避難行動をとる（自助）ためには、常日頃からの備えが必要であり、地域での防災活動（共助）を通じた啓発が大切です。

今後も引き続き、防災シンポジウムや毎年11月の地震津波総合避難訓練などにより、自助・共助の啓発を進め、地域防災力の向上に努めて参りたいと存じますので、市民の皆様のご理解とご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。



## 第1部 基調講演「地域防災力の推進～自主防災組織・消防団の役割と連携～」

講演者： 山口大学大学院創成科学研究科准教授

総務省消防庁消防大学校客員教授

瀧本 浩一氏

一般的に災害時は自助・共助が大切と言われているが、多くの住民は日々多忙だ。いつ起こるかわからない災害のために自助の対策まで実施できていないことが多い。そのため、いざ災害がおこったときには、自助ができず、共助もできない状況になる。

自治会や自主防災組織などでは、消火訓練や救助・搬出訓練、炊き出し訓練などの災害がおこった後の対応活動は実施している。一方、気象庁から発出される大雨警報などの気象警報や市町村から発出される高齢者等避難などの避難情報に対して、避難することを想定した災害発生前の予防活動はあまり実施されていない。

市町村の職員は「自助が必要」とシンポジウムなどを通じて伝えているが、皆はそのときは重要だと思っても、平時は忙しくて自助の対策は進まない。これが公助の限界。本当に自助を進めていくためには、自主防災組織や消防団等のコミュニティが地域での防災活動を通じて、自助を推進していかなければならない。

では、地域で防災訓練をしようと言うが、きちんと訓練の位置付けや目的を理解して取り組んでいるだろうか。災害への向き合い方として、訓練では災害は起こっていないため、訓練を実施するにはまず初めに災害の想定、イメージをすることが大切だができているだろうか。災いが分かっているなければ防災活動はできない。

災害が発生した際には、自助→共助→公助の順となるが、災害発生前の取組は公助→共助→自助と逆になる。例えば公助として、市はハザードマップで浸水する区域など危険な場所を提示する。それを受け、共助として回避行動（足下確認）の防災街歩きをし、防災マップなど地域のカルテを記録、そして防犯としては実施している所は多いが、定期的なパトロールをする。そして自助としては、耐震補強や家具の固定、ガラス飛散防止、備蓄の備えなど、あらかじめ被害を防ぐ努力、被害抑止をしておく。これらを災害が起こる前にやっておく必要がある。

また、災害対策は災害の種類に応じて対応する必要がある。運動会に例えると、運動会の障害物競走では跳び箱・踏み台など種類がある。また、最初の一步（初動）をすばやく対応することが必要。まず被害者の確認。自主防災組織では手当のため止血法や担架搬送などの訓練を実施しているが、「探す」という訓練はあまりしていない。災害時には避難所で安否確認してはいけなく、現場でする。そして運動会では事前に予行演習をするが、同じように防災訓練としてこれらは必ず現場検証として訓練しておかなければならない。訓練には二つの意味がある。一つは習得、もう一つは確認（検証）。訓練を雨が降っているときにやっているか。災害時は雨のときもある。また、災害関連死という課題もある。大規模災害時には避難所生活という過酷な条件下で復旧をしていかないといけない。災害前は防災、災害後は減災として火種が小さい内に押さえる。

言わなくては誰もしない。だから、自主防災組織は防災を進めていく必要がある。公助が企画し、シンポジウムや説明会などで皆に防災の取り組みを働きかけている。ぜひ今日聞いた内容を地域に持って帰って、共助の取り組みを実施してほしい。

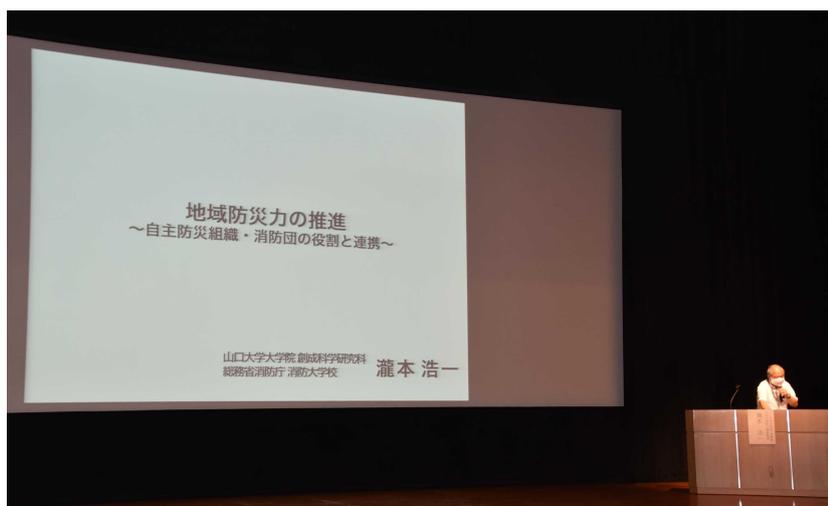
ハザードマップは是非目につくところに置いて活用を。ハザードマップでは被害範囲の程度しか書いていない。行政のハザードマップの配布は広報活動。市民は広報紙を受けるのと同じ感覚で受け取るので、啓発にはならない。ましてや、1件1件時間をかけて各家庭に説明もできない。これも公助の限界。

避難よりも、まずはけが人を減らすのが先。避難するためには足が必要、足下固めておくこと。家具固定などは男性より女性が得意なので、女性目線、女性参画が大事。

これらは全部自助。だから消防団でも地域でも家族でも良い。やらないといけないことを、夏祭りなどで消防団や自主防災組織などの普段のコミュニティの中で伝えてほしい。

これらの活動内容を舞台に例えると、地域全体の活動は劇団。まずは舞台を理解しないとけない。そして次にそれぞれが何をするのか配役を決める。そして台本、シナリオを決める。いついつまでに何をするのがマイタイムライン。最後に必ず稽古をする、これが訓練。どこまで自主防災組織で実践できているか。開演のブザーが災害本番。安否確認する方法は実施しているか。避難していると書いたタオルをかけての避難完了は泥棒に入られるため危険。地域だけで分かる秘密の合図、例えばある地域では輪投げのわかを玄関先にかけている。また、探すという訓練は必要な訓練だが、実施しているか。また、例えば雨災害は事前に情報を取る必要がある。スマホで検索はできるが、大阪府→高石市と順に調べていくのは大変。例えば高石市の情報のページのQRコードをテレビなどに貼り、すぐに情報が取れるような工夫をしているだろうか。

最後に、文政11年の文献。この時代でも隣近所で助けあっている。この時代も行政は情報を出す役割。先人は「普段から用心しておけばもっと多くの命を助けることができた」と記載している。現代人は忙しすぎて用心できていない。家庭・職場などのコミュニティが心を用いるように啓発できればと思う。



## 第2部 パネルディスカッション「地域防災力～自主防災組織と消防団との連携～」

コーディネーター：

高石市防災危機管理アドバイザー、神戸大学名誉教授、兵庫県立大学名誉教授、  
日本防災士会理事長、減災環境デザイン室顧問 室崎 益輝氏

パネリスト：

山口大学大学院 創成科学研究科 准教授

総務省消防庁 消防大学校 客員教授

第1区自治会顧問（前第1区自治会自主防災会会長）

高石市消防団 取石分団副分団長

高石市副市長

瀧本 浩一氏

中谷 正彦氏

小谷 恵美子氏

福井 淳太

### <高石市防災危機管理アドバイザー 室崎 益輝氏>

被害想定やハザードマップをどのように受け止めるべきか。まず被害想定については誤差があると認識する。また、被害想定は過去の経験から決まった事柄のみであり、長期避難や経済衰退の問題などは被害想定がされていないので、被害想定結果よりも被害の質に目を向けていただきたい。そして、被害を我が事として受け止め、こういった対策をすれば被害がどれだけ減るのかと減災について、自治会などのコミュニティのみんなで考えて頂きたい。正しく恐れて正しく備え、そして地域防災力を高めていただければと思う。

### <高石市 副市長 福井 淳太>

市はこれまで国や府と連携しながら、公助でしかできないことに取り組んできた。高潮対策である水門・防潮堤は、平成30年の台風でも高潮の侵入を阻止した。芦田川の水門や、芦田川二層化80ミリ対応は浸水対策に効果があった。地震対策としては、公共施設はもちろん、民間住宅も耐震診断補助・耐震改修補助により耐震化が進んでいる。防潮堤は津波対策として、南海トラフのM8クラスの耐震で整備がされている。市独自の取組としては、津波避難ビル、高砂1号線の液状化対策工事、防災体育館の建設等も実施。また、平成23年度より10年以上継続している総合避難訓練は、参加者が1万人規模と大阪府下でもみない大規模な訓練であり画期的なこと。意識が変われば行動が変わり、行動が変われば習慣が変わり、習慣が変われば運命が変わり、災害時に多くの命が守られることにつながる。

また本市では、自主防災組織の地区防災計画の作成支援を進めており、自主防災組織連絡協議会と連携し、様々な活動を支援する仕組みも始めている。一方、要員動員力、地域密着性、即時対応力の3つの特性を持つ消防団を平成18年から結成している。消防団は公助を担う消防機関であるが、共助の側面も持ち合わせており、「地域防災力の要」の組織として、市など行政機関の公助と地域の共助・自助とのつなぎ役を果たしている。

### <第1区自治会顧問（前第1区自治会自主防災会会長） 中谷 正彦氏>

第1区自治会は高石市の南西部に位置し、加入世帯数は約1,050件。平成25年に自主防災会を立ち上げており、普段の活動としては、市の総合避難訓練の津波避難に参加

している。また、災害は津波だけではないため、年に1度、高石高校横のらくだ公園で防災訓練を実施している。自治会の清掃活動の動員を生かすため、清掃活動後に訓練を実施しており、平成26年度には高石消防署の協力で心肺蘇生訓練と消火器を用いた消火訓練、平成27年度は高石市消防団の協力で可搬消防ポンプを用いた訓練を実施した。可搬消防ポンプ1台で100メートルまでホースを伸ばすことができ、実際に使ってみると、すごい勢いで放水されるため、阪神淡路大震災のような大規模災害で消防隊や消防団がすぐに駆けつけることができないときに、火災の延焼を防ぐことに効果があると思われる。

新型コロナウイルスの影響により、令和2年度と令和3年度は訓練の実施も見送っていたが、令和4年7月17日に久しぶりに実施。高石市消防団の協力により、可搬消防ポンプの使い方を再度教わった。我々のような高齢者から青年団の若者までが参加し、訓練と一緒に実施することは、防災力向上はもちろんのこと、まちの人同士のつながりにもなっていると考える。災害が起こったときには、やはり隣近所で助け合いが大切であり、消防団も含め、こういった地域の方と顔を合わせて実施することは、いざというときの助け合いに役立つと思う。

#### <高石市消防団 取石分団副分団長 小谷 恵美子氏>

高石市消防団は平成18年2月に発足し、現在は3代目西川団長のもと48名で組織している。本市消防団には6名の女性消防団員がいる。全国的には女性分団として活動をする団体が多いなか、本市では区別なく男性とともに様々な訓練に参加している。

消防団の活動は、基本となる放水訓練や近隣市町村の消防団と泉北地区支部訓練、大阪府消防操法訓練大会への参加など。この大会では、平成26年度にポンプ車操法で2位、平成28年度に小型ポンプ操法で3位を受賞した。その他には各種団体からの要望により、普通救命講習なども積極的に行っている。また、自主防災組織が実施する地域の防災訓練にも参加し、消火訓練や救助訓練など、地域の防災力向上につながる取り組みも実施しており、近年では可搬消防ポンプの普及に取り組んでいる。小型可搬消防ポンプはわずか3人で100メートル先の消火が可能であり、女性でも扱うことができる。これまでも総合避難訓練や地域の防災訓練などで使用方法を説明するなど活動を実施し、今年はこの普及活動が評価され、産経新聞社の「大阪の消防大賞」を受賞した。今後も、積極的に普及に取り組んでいきたいと思っている。

女性消防団員の活動としては、大阪府下27市町278名の女性消防団員と連携・交流を図っている。これまで大阪府女性消防団員研修会に参加し、避難所で役立つ100円グッズの紹介や、全国女性消防団員活性化大会への参加するなど活動をしてきた。

今後も、本市の地域防災力向上のため、高石市の女性消防団員として大阪府下の女性消防団員とも連携を密にしながら、「自分たちのまちは自分たちで守る」という意思に基づき活動していきたい。

#### <総務省消防庁 消防大学校 客員教授 瀧本 浩一氏>

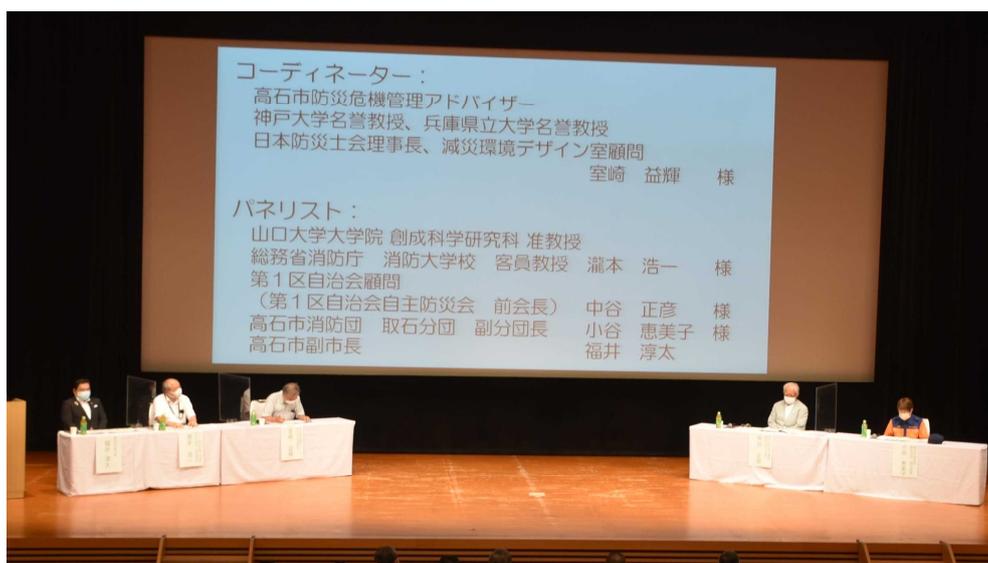
地域の活動を進めていくことは手間がかかることだ。重要なことはリーダーとなる人材が大切だということ。リーダーがきちっとしているところはよく活動している。また、地

域の活動とマッチングさせると良い。他市の事例を紹介すると、瑞浪市では防災活動を持続させるため、どんと焼きを復活させた。焼くので、最後消火しないといけない。活動は人を集めることが難しいが、寒い時期に実施するのでぜんざいなど暖かいものを配ると、皆参加する。また、運動会でのバケツリレーの例だが、学校が準備してくれるので地域の負担が少なく、さらに運動会だと自治会活動に参加が困難な保護者も参加してくれるので良い。負担が減ればその活動は持続しやすい。

福岡県では、防犯と防災をくっつけた組織をつくった。普段は地域を見る、そして災害時は防災の活動をする。広島県呉市では地域に入る仕組みとして、語り部の会を作っている。また、東京都あきる野市では、住民自らが防災研修会や街歩きをしている。住民が前に出ているが、市が良い感じで支えているので、是非参考にされたい。また、長崎県安中地区は消防団と自主防災組織で話し合いをする機会をつくっている。

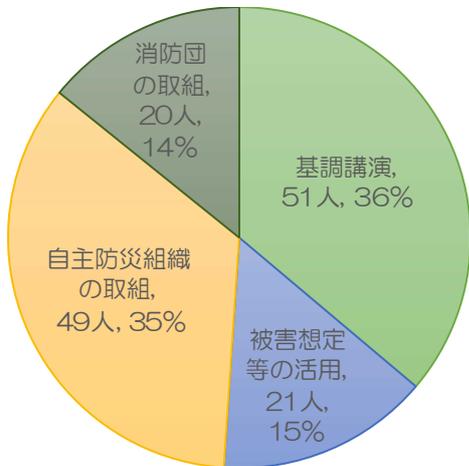
### <高石市防災危機管理アドバイザー 室崎 益輝氏>

災害は進化している。防災もその進化に対応していかなければいけない。従来のコミュニティ防災にとらわれず新しいコミュニティ防災の在り方を考えてほしい。また、その活動をより内容のあるものにするのは訓練。是非皆さん訓練には参加していただきたい。

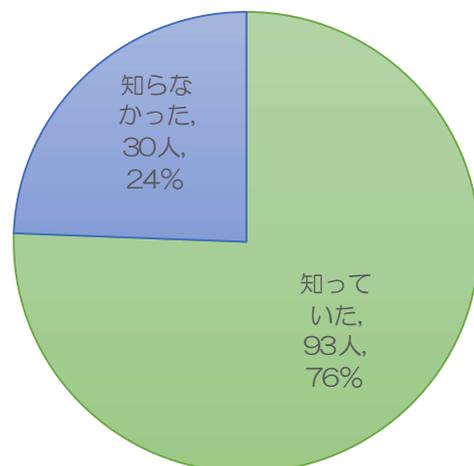


## 防災シンポジウム アンケート結果

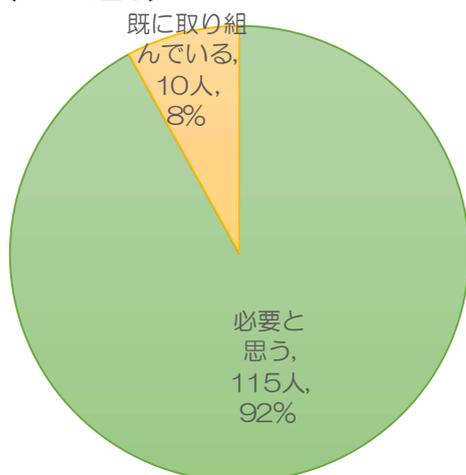
Q1. シンポジウムでもっと聞きたいと思  
った部分（複数回答 N=141）



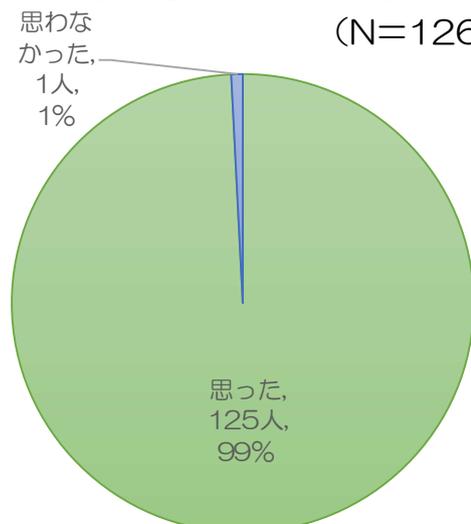
Q4. 消防団の活動について知っていま  
したか。（N=123）



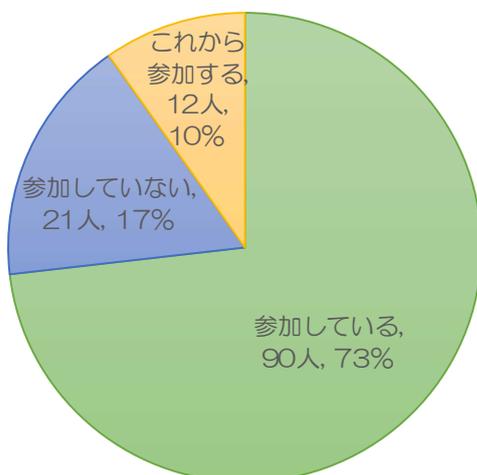
Q2. 地域での防災の取組（地域防災の推  
進）について必要だと思いましたか。  
（N=125）



Q5. 自主防災組織と消防団との連携につ  
いて、必要と思われましたか。  
（N=126）



3. 災害時に備えて、地域での防災の取組  
に参加していますか。（N=123）



## 6. 主なご意見

### <基調講演について>

- ・瀧本先生の話は役に立つと思った
- ・もっと聞きたかった
- ・現在の進行と今後の進め方が明確になりよかった
- ・公助に限界は聞くが、行政が自治会に入るような働きかけや条例を作ったらいいと思う
- ・瀧本先生の話で、言葉の意味が再確認できた
- ・地域での役割を詳しく知りたい
- ・わかりやすかった
- ・点じゃなくて線の活動、繋がりを意識した行動が防災減災に必要と感じた
- ・今までの災害準備では足りていないことを強く感じた
- ・具体的で良かった
- ・素晴らしい講演でした

### <パネルディスカッションについて>

- ・避難が長期化した場合考えていなかった
- ・自助共助公助についていい話を聞かせて貰った
- ・災害に正しく備えたい、未来ある子どものためにも防災時の備えは重要と思った
- ・1区の取り組みが参考になった
- ・自主防災活動の活性化を痛感した
- ・毎年各自主防の取り組みが同じ、変わった取り組みがないならその発表時間を基調講演に当ててほしい
- ・消防団活動を知る機会がこの集まり以外にほしいと思った

### <その他>

- ・実際に役立つ防災の仕方を考えようと思う
- ・参加できて良かった
- ・大変有意義であった
- ・個人情報保護が強く、これが原因で自治会に入る人が減っており、自治会そのものが古いと考える市民が多い
- ・自治会で対応できること、例えば水・ブルーシート等の備蓄をすると良いと思う
- ・防災士と連携できていないので、防災士協会立ち上げ希望
- ・感染防止対策として席の間隔空けるべき
- ・防災について考えようと思った
- ・初参加でしたが面白い話が聞けた
- ・ディスカッション無しで基調講演をもっと長く聞きたい
- ・具体的に何をどうするかの講演や資料がほしい
- ・具体的な事例紹介があればいいと思う